

忍待恋

閑守のうちぬる宵もあるものを  
なと待ひとのつ戻(れ)なかるらむ  
つ戻(れ)なかるらむ

閑中燈

わが影もわれにわかれて有明の  
つれなくのこるまとのとほしひ

いつ女

アノマチノキ  
東路記

高祖妣御記

全

知る史の会

それほとけの御にうめつ・すてに後五百さい  
のときにいたり・しそん世に出たまふへきその  
あかつき・思へはとをし・いま此中けん  
うまれん人・なに・よつてか思るをのはへん・  
此時にしんめいかたしけなくも・さいと  
はうへんのひかりをやハラけ・たちまち  
に上くばたひのうてなをさつて・下げ  
しゆしやうのちにましハリ・しひまん

うめつ・すてに後五百さい  
のときにいたり・しそん世に出たまふへきその  
あかつき・思へはとをし・いま此中けん  
うまれん人・なに・よつてか思るをのはへん・  
此時にしんめいかたしけなくも・さいと  
はうへんのひかりをやハラけ・たちまち  
に上くばたひのうてなをさつて・下げ  
しゆしやうのちにましハリ・しひまん

忍待恋

30 閑守のうちぬる宵もあるものを  
なと待ひとのつ戻(れ)なかるらむ

閑中燈

31 わが影もわれにわかれて有明の  
つれなくのこるまとのとほしひ

いつ女

きようのちかひをあらハしたまふ・これに  
よつて・こくとのばんミンあゆミをはこひ・  
たなころをあらハせて・たれかりしやうにあつ  
からざらん・ここにいのりをかけたまふくハ  
しゆ・北川の大守さきの大なこんといへ  
の卿の北のたい黄門としなかの卿の尊母二  
てそおハしける・あいう御心のま・にて・世の  
おほしこよなふ・時のきらやんことなし・王  
欄のもとにて花のうつろふをおしミ・金  
樓のうへにて月のかたふくをしたひ給ハ  
よりほかハ・御身にうれへたまふへき事  
ゆめはかりもおハせさりつるに・きやう  
ちやう三ねん八月十八日・冥葉もいまたおち  
あへさるに・秋津しまのみこともり・前の閑  
白ひてよしこう薨したまひて・日のものと  
ひかりをうしなひ・世の中よ・いかになりゆかん  
とすらんとミな人物にあたり・あしをそら  
にて・ねぬ夜の夢にたとる・かの大なこんの北  
のかた・わかうよりの御なしミおもた・し  
かりし御めくミのほと・月花の御あそひにも・  
事とある時ハまつ人よりさきにとものし  
たまへれば・わすれ草いつこふへくも

あらず・袖の露もまだかハかぬに・又のとしの  
やよひのはしめに・さしもあさからす二世と  
かけをきたまいつる大なこん殿・ひよくの枕  
のうへに・かいらうの夢さめたまひて・つるに  
さらぬわかれと成給ひぬ・そよや何事も限り  
あるならいよと・世のはかなさもおほしするさま  
にて・やかて御くしおろしいむ事なとうけ  
させたまひて・今ハほとけの御をしへならては・  
なにはかりの事にか心をもつゝやし侍らん・  
なき人のたまひをきてしすぢもあれば・  
こしちの雪のふるさとも・ひたふるにおもひ  
たちぬへきを・君ひでよりいまたいとけなく  
十にだにみたせ給ハで・たちねの御うしろ  
かけに・あやなくたちおくれさせ給ひぬれハ・  
いとほいなきわざになん・あハれにて物し  
給へるを・見はなちまいらせてくたりなんも  
いとかなく・又おひたち給ハんをよそながら  
いかにと思やりまいらせなんもおほつかなく・御なつ  
かしさもせんかたなかるへし・なをやおほき  
おとゞのおほせをき給ひし・御ゆひごんをたがへ  
侍らんもいと浅まし・いか・ハせんく・いはもる  
水の人やかならず・あふささるさに思ひくだけ

りていとたうとく・いにし人のしるよしも程  
とをからぬあたりにて・もと見しものども  
の・をのかさまくとしへつ・こ・らつどひき  
たれかにも・思ひ出る事かすくにていとあ  
はれなり・三かわの国やつはしにいたりぬ・  
はるくきぬるたひおしそ・われも思ひ  
をかけ川や・さよの中山いのちのうちに・  
かくきてみんなと思ひきや・ゆふしもはらふ  
つたのミち・これなんうつの山べといへは  
へ夢にたに思ひもかけぬうつの山うつ・に  
こしてけふ見つるかな・なをいきく  
べうくたるうみのほとりに出ぬ・めも  
はるに見わたせは・みほの松はらハいりうミ  
の波にうかへり・あかすなを見すぐし  
がたくて・舟にさほさして・みな人ミおの  
松はらにあかり・心のゆくくわけもていれは・  
しんくたる松のおくに人のすみかにぎハ・し・  
ことたかひてあやしけれハかくれさとやらん  
とて・わうしつが事思ひ出らる・やしろのある  
をとへハ・はころものミやう神といふ・げつきう  
でんよりあまくたりまして・いかにと  
ころせくおほしつらんと・身をつみて覚

てなん・しばくか・つらひ侍りつるに・世のさがに  
くき人のわざにて・あめがしたまことのやミ  
とくれまどひぬへき・一ふしのいできたり  
けるに・世のため君の御ためなといひそ  
のかされて・しらぬあつまのたびにおも  
むく・よハひいまハのほとにて・いとわり  
なき事になん思ひたゆたひしかど・いで  
やとをき世のむかしを思へは・せんけん  
とうじとやらんハとらに身をなけ・しび  
大王とかやハはとのばかりに身をかけ給へり・  
ちくるいてうのいのためにだにある・いはんや  
君の御ため世のため・又ハ子を思ふ心のやミにハ何をか  
思ひわきまへ侍らんとて・やすくと思ひ  
たちぬ・したしきゆかりの中をはなれ・ゆく  
もと・まるもおなしつらさのなみたに  
てかへりみるミやこのやまく・かくれゆくなん  
いと心ほそし・いせおはりのあはひをゆく  
に・うミつらのなミとしろふよせかくれは・  
まことにうらやましくもと思ふ出らる・はやくの  
世に見なれし所々・まずあつたの宮にまふ  
て・ぬきたてまつりぬ・ひさしき世よりの御  
ちきり・神もやおほしいつらんと・しでに渥か・

侍へれハへあまさかるひなの長路のうき  
旅に月のミやこそわれもこひしき  
それよりきよみがせきにあかりぬ・こ・二  
たかうぢ将ぐんのだてをき給へるてら・  
すなハちせいけんじといふあり・からに  
まされる物三ツのひとつとかやいふなる物を  
と・かのてらのすのこにむれいて・はるけき  
うミにのぞめる寺ばうさらに心のゆく  
かたもしらず・ゑにうつすともふても  
をよふまじうなん・なを見給へハ・おくまり  
てつくりなせる・にはのか・り・たきの水  
さ・やかに落ちて・いしまのくさあをミ  
わたれり・花におくれし梅の木たち・  
わか葉のしげりなから・見ところありて  
雲にもえだかはすべくのびて・こちたし・  
のうぜんといふなるかずらの・をのれひとりところ  
えかほにて・くれなるのちしほにこかれ  
みちたるなん・又なる物なくめもあやなり・  
此花のたねたまへなどのたまはすれ  
はあるじのばうもけうにいりて・かく  
御らんしはやすもあらぬ・いやしき松の  
かきほにか・りて・おのがちぎりもいと

くちおしきすぢにと・思ひみたる・花  
かつらの・かゝる時をやまちえたるらん・  
御かへるさにはミヤこのつともいざなわ  
給ひてよ・そのまゝほりてまいらせなんなど・  
いとけざやかにきこゆれどねなからおし  
とりうつしなんハ・あともさすがさうぐし  
かるべければと・おぼしこらへてなんすくし  
たまひつ・あハれさのいつくハあれど・せい  
たんじにぞめもとゝまり給へる・つき  
そひ給へるごだち・おひたるもわかきも・  
かゝる事のめつらかなれは・心のをき所なく  
なかめいりて・いそねのまくらも・こよひハ  
こゝにてこそからまほしけれなといひ  
あへれにしあればへ人やりのみちにし  
あれは心のミきよみかせきにとめつ・そ  
ゆく・ふしの山をみれは・さ月のつこもり  
に・時しらぬ雪まことにかのこまだらなり・  
さい中將の見たりし日も・この月のけふとかや  
いふなる物をと・あハれもいとゝそひて・とも  
なりけるおとこをんな・をのかし・みな哥  
よみれんがす・いふはかりなき山のすかた・たち  
ある雲のたゝすまる・ふるか残るかの雪

の色・まことにことは尚露もいはれず・心  
もさらにをよましかれどとて御うた  
にへよそにてハ名にのみたかきふしの  
ねのゆきてかたらんことのはもかな  
ふしのねの雲よりうへにふる雪をあハれ  
こしちの人にミせハや みちすからふし  
の山尚・みえつかくれつ・おもかけ御身にたち  
そひて・をくりくるかとなんおほす・それ  
よりみしまのミやうじんへまいり給ひぬ・  
ほんぢは大つうちせう仏・じつこうざう  
ぢやうの御事・しゆせうにて見たてまつり給ふ二・  
いらかやぶれとほにおちて・雨つゆにおか  
され給へるさまげにうたてし・じゆしや  
ぬぶつたうのことハりにまかせて・御だうの  
ほうがしてとをり給ひぬさらでだにかり  
ねのこのひたしけたるに・さみたれの  
なこりなをいみじうかきくれて・こゝ  
にてゆくりなく日かすふりぬ・ねられ給  
ハぬまゝによものあらしなをはけしふ・  
まどうつ雨のこゑとをるばかりにすまし・  
かのすまの秋のねさめのとこ・又春のなが雨の  
いぶせかりし事など・かきつめておほしあ

ハすれはへとをき世のすまのうらミに  
たゝへても身をしる雨の袖ぬらすかな  
霖雨五日にてあかりぬ・はこねの山にとて見  
給へハごんだんのみたらしといふこすひ・山  
のうへにまんぐたり・こいそおほいその  
うらくすぎて・江どにいたり給ぬ・あハれ  
さのかすくあつまのはてしなけれど・ミヤこ  
なりせは・思ふ事なくてや見ましとうち  
わびて・くもをなかもるあしたにも・月にむか  
へるゆふへにも・わする・方なき京をは・とを  
山鳥のおのへより・へたて・つらき旅まくら・  
あかしかねつ・ななき夜の・夢も見なれぬ  
とこのうへに・すめはすまる・ならいとかや・  
三とせ程なくをくりむかへぬ・ことしハことに  
思ふやうありなどいひて・上中下ミなこと  
ぶきいはふ・ついたちはつねにてなんあれ  
ばへはつ春のはつねをいはふひめこ松  
もとのいはねにひきもつれハや ねかい  
のほいかなへるにや・うき夢のさめ心ちにて・こ  
としにはかにたちかへり給ぬ・みちすからの  
春のけしき・ありし御くたりのころ・なつ  
山のしげミをわけさせ給ひしにハ・やうかハ

りていとおもしろし・するかのくにかんばら  
とかやいへるにハ・日たかくとゝまりぬ・もゝの  
花の夕ばへいとおかしきさゑミて・梅  
にもたちまさりぬへくうちかほりて・こゝ  
にとゝまれる事を・花も心えかほなれは  
へ行かれて此山もとにやとかれハあるしかほ  
にも花そにほへる・なをありぬへけれど・まつ  
ことそぎてかきとゝめす・かくてかへりいる  
ミヤこのそもも・きさらきのちの五日ころ  
にてなんあれは・まことに天神の御りしやう  
にやと・やかて無盡興千句をつらねてたて  
まつりぬ・そのほかのかへりまうしども・いつ  
れのかミほとけにかをろかなるへき・しはし  
さでもなくさミぬへきを・ならハぬひなの  
やつれにやあらん・むねいたく物わすれなとし  
て身にしらぬ事のみおほかれは・たうち  
こそあやしうげんある物なれとて・あり  
ま山のゆにいり物したまへれど・いなのを  
ぎゝの露ほとも・そのしるしおほえ給ハね  
はいまはたゝやすらかならんかたに御心  
のどめて・はかなきなることの・うたぞうし  
などをことくさにてものし給ひなんこそ・

よもがしまのいく薬りならめなど・人も  
いひきこえ・御身もさんとおほえ給ひしに・  
しる人の御かたにいつくしく・きよなる  
ひめきみさへいてきたまへれば・時ありて  
さくうどんげをまちえたる心ちにて・思ひ  
をのぶるすがむしろ・すこしふしみの夢のまも・  
あひ見ぬほといとゆかし・日をかそへつ・松  
かえの・千代のゆくゑのおひさきをも・うちそ  
ひてこそ見まほしきに・ゆくりなく又  
あつまのたひにともよほしきこゆ・こはされ  
はなにのゆへにかあるらんゆく御こ・ろハ  
さる事にて・と・まるしもそさらにかな  
しき・あたを誰におほさねば・かこつへき  
人もなし・とがをおかし給ハねは・うらミ  
おふへき御身にもなし・しびあまねくものし  
給ひ・人をしてさらにすて給はねハ・この  
御かけにたちはなれなんハ・くらき夜に  
ともしひをそむくなるらんとて・なけく  
ものおほし・世の中にある人よろこびハ  
まれに・うれひハしげし・中にあはれむ  
へきハ・おひたる人のより所あらず・ありふ  
べきたつぎもなく・けふあすともし

大しさい天神ハ・せいとのりよはくをうれへ  
たまひて・とふらうの月を見てハ・京のそら  
をこい・くハんをんじのかねのをとに・こきやう  
の夢をおしミたまひ・家はなれて三四月  
おつるなみたハはくせんかうと・詠し給ひし  
御心つくし・いかてかおほしわすれんと・いと  
たのもしくてなんおかミたてまつる  
へにしへゆきひかしへゆくもふるさとを  
こふるハおなし思ひならすや・ねかいみな  
あまミつ神ときくからにいのるゆくゑの  
たのもしきかな・はやくきらくのほんぐわい  
をとげしめたまへ・まんぞくのときをえて・  
連哥百あん・月なミにほうしやしたてまつらん・  
我又ぐわんしゆの御つかひとして・ゑんじうの  
めうほうまい日に百へんじゆしておかみたて  
まつる・かたしけなくも此めうほうハ・三世  
のしよふつのじんぐのわうざうたり・しよ仏  
ハ此大せうをすみかとし・此めうほうをいのち  
とし・このめうほうをゑぶくとし給ふ・されハ  
一ねんしんげのくどくハ・五はらミつのせんに  
すくれ・五十でんぐのずいきハ・八十かねんのせに  
こえたり・めうほうれんけきやうと・となへたて

らぬいのちのうちを・いかにせんとうらみ・  
さまよへるそいとあはれなる・又かなしむへきハ・  
みとりこのは・にすてられて・道のほとりの  
露しもにむれ・とりけたものにあふ  
さる・そいとかなしき・これを見る人たれ  
もはた・いと・ものうき事にハいひなや  
めれど・世として心ならされは・はごくミ  
そたつるまでハたれかハせん・この御なさ  
けを・千いろあるかけにて・きうかのあつき  
日をしのぎ・けんとうのさむき夜を・  
わする・ものおほし・あふぎねかハくは・神  
仏じひせいぐわんをおこし給ひ・ぐハんしゆの  
りよかうの思ひをやめ・しよにんのねかいをミ  
てしめたまへ・もとよりしんぐゝあさからす  
して・じんじやのたえたるをおこし・仏寺のふり  
たるをあらため給ふ・かミのほうへい・ほとけ  
のくやう・そうにふせし・ぞくにじひし  
給ふ事・十廿の事ならされは・人いかてか  
かそへて知たてまつらん・ぶつじんさだめて  
せうらんしたまふらん・此君しゆごし給ハす  
は・何をもつてかしんめいぶつだのミやう  
りよとハしたまわん・中にも当しや天まん

まつらんに・めつせんつミやあるへき・きたらぬ  
くどくやあるへき・よく此きやうをたもつ  
がゆへに・しよぶつミなくわんぎして・むりやう  
のじんりきをだんじ給ふとなり・すい  
しやくのかミくゝ・なをもつてかくのことし・  
まつたうしやてんまん天神・きちじやうじ  
にての御たくせん・わがゑんじうのほそみ二  
おゐて・いまたあく事をえす・をんきに  
我をとハんとほつせば・すべからくミつたんを  
あらためて・ほつけのはつかうをしゆせよとなり・  
ばんじんもろくゝのほつけしゆごののぞみを  
なし・十らせつ女は・めうほうおうごの思ひ  
をなす・このたびあらたにたんきをてらし・  
ぐわんしゆののそみをみてしめ給ひ・南無  
卅ばん神十らせつ女・日ほんこく中の大小の  
じんぎ・べつしてハ天せう太神八まん大ほ  
さつ・北野のてんまん大しさい天神・このたび  
むりやうのじんりきをだんじ・ぐわんしゆ  
すミやかにきらくのゑミをふくミ・じうらく  
じやうちうの京のうちに・ぎよくろうきん  
でむのゆかをみかき・しそんひこばへ枝を  
つらね・御ぐわんゑんまんそくさいゑんめい・

ふつきばんぶくならしめたまへ

こんど我ら・御ぐわんの御つかひとして・北野へまうてはんへりしに・あふきたてまつるらうにやくなん女・あしたの日の出るにさきたちよるの月の入にとまひて・行も帰るもさらにいとまなし・まことにありかたく覚へ侍る・ちかいあまみつ神の御心にハ・数ならぬみしめをも・なをやうけひき給らんと・いとたうとくてなん・つやし侍る・秋ふくるしもの暁・かねのこゑいとすさましよう・おひの枕いねかたきま・に・身を思ふとてにや・あらん・君の御たびいての事・むねにつとふさかりみちて・おほえはんへれは・せめて心やるかたもやと・かのあつまにうつろひ給ひにしみちすから・おりにふれこにつけ給ひての御なかめぐさ・人にハえちらし給はぬ事を・へだてなき御めくミのあまり・かたはしつ・をのつから・うけたまはりもらしぬなにしらぬみ・にも・あハれさのふし／＼・たゞにはえ・すごしかたき事になんなりて・御みちのきのやうなる事を・かんきんのはじめにつらねはん

て生きぬいた女性の苦悩と、その存在の重みを感じさせる。まづは天文十六年（一五四七）尾張国海東郡沖の島に生まれた。現在の愛知県海部郡七宝町字沖之島である。信長の配下であった父篠原主計が早く没したため、母は幼いまづを連れて、妹の嫁ぎ先前田家に身を寄せた。まもなく母は高島氏に再嫁し、まづは前田家で成長する。やがて従兄利家と結婚し、翌永禄二年には早くも長女幸が生まれた。利家とまづの間には二男九女があり、四女豪は生まれるとすぐ豊臣秀吉とねね夫婦の養女となった。利家の晩年には側室寿福の生んだ三男利常があるが、他はすべてまづとの間に生まれた子供たちであり、夫婦の仲の睦まじかったことが知られている。

秀吉夫婦と利家夫婦は、お互い若い頃からの隔てのない間柄で、とくに安土城内では隣同士、木槿垣に間に親しく往来する心易いつき合ひであった。秀吉が天下を統一してからも篤い信頼関係は変らず続いている。

文禄四年にまづは秀吉から化粧田を与えられ、その翌年利家は大納言に叙せられている。

慶長三年に秀吉が催した醍醐の花見には、秀吉の妻ねねはじめ側室たちとともに、まづも主賓として招待され、ねんごろにもてなされたことは有名である。

その年八月に秀吉は利家に秀頼のことを託して没し、翌

へる・よハひいたくふけぬるにや・ものおほ二ゆめはかりもはんへらす御ことののしな／＼も・みなしらぎくの・しもにまどひて・た、心あてはかりにて御さ候・ことはのさま・てにをはのつ・き・きこしめしなをさるへし行としの日をかそへつ・あつまより

またたちかへるはるをこそまて

慶長七年九月 如意珠日

此手見て笑ある人のかたほうに

ふしの山程耽かいてきよ

（金沢市立図書館所蔵）

前田芳春院と「東路記」について

「東路記」は加賀藩祖前田利家の妻まづ（のち芳春院）が、慶長五年五月、徳川方の人質として大坂から江戸に下り、七年三月に湯治のため有馬温泉へ赴いた。その間の道中の記録である。著者は芳春院自身とされているが、内容を読むと、芳春院に従う女房たちのうち、ことに親しかった一人が芳春院の心情を思いやって書いたものようである。正確な旅の記録の部分は少ないが、芳春院の心情を述べた部分は、歴史の大きな転換期に、ただならぬ立場に立たされた

四年三月に利家も没した。利家は長子利長に秀頼を守るために三年間大坂を離れぬようにと遺言した。まづは髪をそろして芳春院と名のり、利家の遺骸を金沢まで送り、葬儀をすませて大坂へ戻った。

徳川家康は利長に対し、長らく国元を留守にしているから、一度加賀へ帰るようにと勧めてきた。この勧めには断りがたい事情もあり、利長は母芳春院と相談の上、加賀へ帰った。

ところが、まもなく利長に謀反の企てがあるという流言があり、家康は怒って加賀へ兵を向けようとした。利長は驚いて老臣横山長知を急ぎ家康のもとに派遣して、家康に對し他意なきことを弁明させた。家康はその証しとして、利長の母芳春院を江戸へ人質にさし出すこと、その代りに家康の孫娘珠姫（將軍秀忠の娘）を利長の弟利常（三代加賀藩主）に嫁がせ、徳川・前田両家の間を固めることを申し出たのである。

芳春院が人質として江戸へ下るまでに、右のようないきさつがあった。

芳春院は専ら前田家を守るためにのみ、進んで人質となつたように伝えられているが、「東路記」を読むとそれだけとは言えないようだ。

「東路記」の中で芳春院は太閤秀吉の大きな恩、利家と

の長い縁、秀吉の幼い遺児秀頼への深い思いを述べ、自分の身を犠牲にしても「君の御ため、世のため、又ハ子を思ふ心のやミには何をか思ひわきまへ侍らん」と進んで人質の旅に出て行くのである。豊臣家のため、世を戦乱から守るため、そして子供たちのための犠牲という認識である。尾張・岐阜・安土・加賀・伏見・大坂と、転々と利家に従い、戦う利家を後から支え続けた女性の言葉としての重みと説得力を持つている。

江戸に下ってから、徳川方の扱いも丁重をきわめた。芳春院はその年五四歳であるが健康がすぐれず、頭痛、歯痛、胸部疼痛になやまされ、齒茎からの出血が止まらず危篤に陥ったことがある。將軍秀忠は大いに驚いて典薬頭を遣わし、老中たちが徹宵つきそった。そのことは芳春院が六女千世（細川忠隆の妻）にあてた手紙により知ることが出来る。

もし芳春院の生命に何事があったら、それは徳川家にとつても大変な事態であり、東西の力関係が大きくゆれ動いたことと察せられる。芳春院はそれほどの重みのある、大きな存在であった。この後、有馬温泉に湯治に行くことが許されたのであろう。

有馬温泉には約半年滞在した。芳春院の二男利政は故あって京都郊外に隠棲していたが、ここに女の子が産まれ、

その喜びに会うことが出来た。

湯治を終えて江戸に還ることになるが、「東路記」の著者の女房とは、京都で別れた模様で、「東路記」はここで終っている。この女房は芳春院の使いとして、北野天満宮に参詣している。

芳春院は慶長十六年に伊勢参宮のためもう一度旅をしているが、慶長十九年六月まで、自らの意志で江戸に留まつた。芳春院が金沢へ帰った年、大坂冬の陣がおこり、翌年五月夏の陣で豊臣家が滅亡した。

「東路記」は十七丁ほどの短い道中記であるが、芳春院作と思われる和歌が十首ほどのせられている。この道中記は女性の筆になるためか、『加賀藩史料』や『石川県史』などにはほとんど登場しない。柴桂子さんの論文「旅日記から見た近世女性の一考察」（吉川弘文館『江戸時代の女性たち』所収）の一覽表にはじめてその名が発表された。かねてから芳春院に関心を持っていた私は、柴さんの御了解を得て、すぐ金沢市立図書館から写しを取り寄せた。その後「知る史の会」の会員たちの希望で、毎月の勉強会の日の午後、苦勞しながら皆で読み了った。四百年近く昔の女性の筆になる文章に、はじめて直接に触れた。私たちのうひまなびの古文書である。

（門 玲子記）

## 松が岡史料

小林義明

### 松ケ岡

安政五末年  
三月廿二日

一 赤坂新町二丁目嘉十郎

中上候、私店竹次郎妻ひさ  
儀当月二三日家出致候處  
相州鎌倉松ケ岡東慶寺  
え驅込離縁之寺法受度  
旨申立候に付竹次郎伯父  
同父、同町五人組店熊五郎  
儀同寺江罷出候様飛脚を  
以申越候間同人病氣に付  
代平右衛門与申もの明二七日  
彼地江出立為致申度為御訴

### 松ケ岡

安政五末年三月二六日七時

一 赤坂新町二丁目嘉十郎

申上候、私店竹次郎妻ひさ

儀当月二三日家出致候處

相州鎌倉松ケ岡東慶寺

え驅込離縁之寺法受度

旨申立候に付竹次郎伯父

同父、同町五人組店熊五郎

儀同寺江罷出候様飛脚を

以申越候間同人病氣に付

代平右衛門与申もの明二七日

彼地江出立為致申度為御訴